

資料紹介

「中山新一郎入隊日誌」

安 裕 太 郎

本稿で紹介する史料は、歩兵第九聯隊（大津）に一年現役兵として入営した中山新一郎の「中山新一郎入隊日誌」（中山芳澄家所蔵）である。日誌に記述されている期間は、大正十一年四月一日から九月までである。十月から三月末日までの日記があつたかどうかも含めて不明で、現在残っていない。本史料紹介では大正十一年四月条の紹介を行う。

一年現役兵制度は、明治二十二（一八八九）年十一月に定められた六週間現役兵制度を、大正七（一九一八）年三月の徴兵令改正によつて新たに制定されたものである。大正八年十一月に、「一年現役兵条例」（勅令第四七六号）、「一年現役兵条例施行細則」（陸軍省令第五〇号）と法整備が行われ、「一年現役兵条例」は同年十二月一日施行となつた。その対象は、二十歳未満で師範学校を卒業した者及び満二十歳以上で師範学校に在校し、満二十三歳までに卒業する者であり、

「陸軍大臣ノ定ムル所ニ依リ其ノ教職ニ在ル地又ハ其ノ師範学校所在地ノ師管内ノ歩兵聯隊ニ編入シ服役」する。^①入営期日は四月一日と定められ、入営後「概ネ四月ノ後之ニ一等卒ヲ、概ネ六月ノ後之ニ上等兵ヲ命シ概ネ九月ノ後之ヲ伍長ノ階級ニ進メ現役満期退営ノ際軍曹ニ任」じられる。その後、昭和二（一九二七）年四月の改正により、短期現役兵制度へと改められた。

日記の筆者である中山新一郎は、『乙訓郡誌』^②によると、父親は中山芳松（通称新造）、祖父は中山忠兵衛であり、京都府乙訓郡向日町物集女の人である。乙訓高等小学校を卒業し、京都師範学校に入學する。卒業後直ちに南桑田郡の本梅尋常高等小学校に訓導として奉職する。大正十一年に一年現役兵として歩兵第九聯隊に入営し、その後亀岡尋常高等小学校（南桑田郡）、向陽尋常小学校（乙訓郡）で教鞭をとり、

大正十五年四月から石作尋常小学校（乙訓郡）の首席訓導となる。教職業務の他には、乙訓郡の「地歴研究会」の主事をつとめ、また民俗風俗にも精通し、「江馬風俗研究会」に属し、その中堅として活動していた人物である。

中山が入営した歩兵第九聯隊は、明治七年に聯隊旗を拝受し、第四師団（大阪）に属し、日露戦後には新設された第十六師団（京都）所属に変更され、大正十四年の宇垣軍縮に伴い、同年五月に京都深草村に移駐（移駐前は歩兵第三十八聯隊が駐屯）した。昭和期には、満洲駐節部隊となり満洲事変に参加し、日中戦争では南京攻略、徐州会戦、武漢攻略に加わる。アジア・太平洋戦争期には、第十六師団隷下として南方戦線で戦い、昭和十九年のレイテ島防衛戦で玉碎する。歩兵第九聯隊は、中山が入営する三年前のシベリア出兵にも出征しており、入隊日誌には中山が学科、日常生活の中で教官からシベリア出兵の話をされている記述が見られる。

「中山新一郎入隊日誌」の記載内容の解説にうつる。内容は主に一日の訓練内容（学科、実科など）、兵営生活の所感が記載されている。その中には、中山が服した一年現役兵役に関するものも含まれる。一年現役兵は、一年の現役を終了した後は第一国民兵役に服し、他の徴兵対象者に比べ、現役期間の短縮といち早く将校としての待遇を受けることができ

るなどの特権を有していた。四月八日条では、「一年現役兵条例」についての説明を受け、

それに依ると僕等は来年三月終末試験を受けて及第すれば見習士官として三月予備役に務めれば陸軍歩兵少尉となりて高等官八等の待遇を受けらるゝとの事である。これは一年現役兵としての僕等に与へられた特典である。僕が若し任官すれば来年中には奏任官の令遇（イ）イを受けることが出来るのである。これが小学校なれば三十年間も継続して漸く奏任待遇としての令遇（イ）イを受けるのである。彼此比較すれば雲泥の差である。一つ奮発して長いダンペラをつつてやろう。

と一年現役兵に与えられた「特典」は、小学校に勤務していただだけの者とは「雲泥の差」があるとしている。「ダンペラ」とは日本刀を意味し、ここでは軍刀をさす。明治四十五年二月の「陸軍服制」（勅令第十号）によれば、下士兵卒に佩刀は認められておらず、佩刀できたのは見習士官・准士官以上の階級であった。「一つ奮発して長いダンペラをつつてやろう」とは、他の徴兵者が下士兵卒で現役を終えることに比し自身は佩刀できる階級へ昇進できる存在であることを暗に示している。他の徴兵者との待遇の違いに関する所感は、翌日の九日条でも見て取れる。中山は、他の現役兵の訓練風景を

見た上で、

この人等はあんなにして毎日朝起きるとすぐ木銃を握って出で午後は僕等が夕食をすました後でもまだ気合の聲が聞える。これを十二月まで続けて漸く上等兵になる事が出来るのである。而し其中でも三分ノ一程だけが選抜されて進級するのであって、後の人は一等卒として残るのである。其事を思ふと僕等の待遇は実に有難い。あんなに僕等が毎日きばつたらどんなになれる^う知れない。上等兵もあんなに奮励しなければなれないと思ふと三つ星を付けて居る人はなか／＼ねうちがある。

とし、上等兵への進級を例に挙げ、「僕等の待遇は実に有り難い」とした。また、十八日条では、

夕食後、酒保のベンチで同輩が歌をうたつて居たがそれを後で古兵殿が聞いて切りに憤慨してゐた。勿論歌なんか歌ふといふ事は全然まちがつてゐるが注意するにしても単に歌つたらいけないと言へばよいものを、お前等は師範学校を卒業したゞけだないか、志願兵なら兎も角も現役兵だないかとか種々下らん事を一人つぶやいてゐた。なぜあんな事を言ふのだろう。其の心の奥底には何物かゞなければならぬ様に思はれる。／吾々一年現役兵は衆目の注意の焦点となつてゐるのであるから大いに気を

付けねばならぬ。軍隊といふ所は皆根性が変にひねくれて人を正当に見る事が出来ない様な人が沢山居る様に思はれる。いや、そんな人になつてしまふのである様に思はれる。

と、一年現役兵として「衆目の注意の焦点」となつてゐるという意識が見てとれる。また、あわせて自身が生活していく軍隊という存在に対しての所感を記している。十九日条には、教練の時、助教に矯正される時、何んだかしかられてゐるやうな声に聞へて残念でたまらない。これまで比較的に丁寧な言葉を掛けられて居た自分等が、にはかに隊内へ入つて頭から怒鳴りつけられると自尊心を傷けられたやうに考へられて頗る不愉快な気分になる。然しこれも慣れゝばそんなに感じないかも知れないがもつと何とか改正が出来ないものかな。わざと故意に卑しい言葉を用つて居るやうに思はれる。

と記載されている。当時、一年現役兵の対象となる師範学校卒業者などは、地域における知識人層であつた。しかし、そのような地域の知識人層であっても、入營し教練を受けていけば、「頭から怒鳴りつけられ」て「自尊心を傷けられ」る。四月における記載には、自分達は「これまで比較的丁寧な言葉を掛けられて居た」地域の知識人層であり、一年現役兵

として、「衆目の注意の焦点」となり、他の徴兵者にはない待遇が与えられているという自意識を持ちつつ、そんな自分が、「自尊心を傷けられ」る軍隊という存在に対する戸惑いが伺える。

一方で、五月五日条では、入営してからの始めての行軍の休憩の際に、パンや菓子を食べに抜け出したという記述に対し、朱字で「宜シカラヌ」と指摘されている箇所がある。一年現役兵の訓練の一つとして、日記内容への教官によるチェックが行われていたと思われる。五月五日条及び四月条以降の本文に関しては、次号以降の投稿を予定している。

この他、四月条における記載内容は、平日の訓練状況、大隊長・中隊長の訓示・注意、休日の生活（外出や面会）など多岐に渉る。兵営内における一年現役兵の教練や運用、生活が伺える。

一年現役兵に関する研究は、徴兵令改正過程における意義や一年現役兵が兵役中・終了後に如何なる役割（軍隊体験の発信・教育普及）を担っていたかについて言及されているが^③、管見の限り未だ少ない。その上で、一年現役兵の運用・活動内容や、特権的な待遇を受けた彼等の兵営内における生活、彼ら自身が軍隊という存在をどのように認識していたのかといった一年現役兵の実態について、入営から約半年間に渉る

期間で追うことのできる本史料の意義は大きい。

〔追記〕

本稿は、向日市文化資料館において平成二十七（二〇一五）年夏の「くらしのなかの戦争」展に初めて展示されたのを契機に、所蔵者である中山芳澄氏のご許可をいただけたことで執筆することができた。また、執筆にあたっては、向日市文化資料館の玉城玲子氏より数多くの御助言を頂戴した。意義深い史料の翻刻・紹介という貴重な機会を頂戴し、執筆できたことを、文末ではあるが厚く御礼申し上げます。

〈凡例〉

- 一、本稿は、「中山新一郎入隊日誌」大正十一年四月一日から同月三十日分を翻刻したものである。
- 一、漢字は、原則として常用漢字体を用いた。
- 一、翻刻にあたり、読解のために適宜句読点を付した。
- 一、削除・訂正された文字に関し、判読できる箇所は〔□〕とし、誤字、当て字と思われる箇所には、（ママ）を付し、挿入・書き加え箇所は〔□〕で記した。また、類推できる箇所には（カ）を付した。
- 一、段落における改行は／で記した。
- 一、六日条における「（A）」のA部分は、史料本文では手書きの図が記載されている。

註

(1) 「一年現役兵条例」(勅令第四七六号)第一条

(2) 乙訓郡誌編纂会『乙訓郡誌』(藤本兄弟社印刷所、一九四〇年)

(3) 加藤陽子『徴兵制と近代日本』(吉川弘文館、一九九六年)
／一ノ瀬俊也『近代日本の徴兵制と社会』(吉川弘文館、二〇〇四年)

中山新一郎入隊日誌

(本文)

僕の一生の行程中に於て此の意義ある一年間の生活を永く記念せんが為感想として想ひついた儘を記して見やう。／人間の運命といふものは一寸した事から大辺方向が變つて行つて全く自分の予想外の方角へ行く事が往々ある。と或る本に書いてあつた。眞実に自分等の前途は謎の様なものである。勿論自分等は自分等の理想としてある到着点を予想して其の到達点「所謂光明の彼岸とでも言はうか」に着かんとして毎日努力してゐる。而し我々の理想といふものは万古不變のものでなくして我々の人格が⁽⁷⁴⁾高上して行くと共に其れに比例して高上するものである。然しこんな場合は当然の事であるから一步進んだ理想が出来ればまたそれに向つて努力して行けばよいのであるから別に不思議な事も又困ることもないがある理想を立てそれに向つて全力を注いで努力して居ても其の人の環境の善悪によつて其の努力を⁽⁷⁵⁾剝がれる場合が非常に多いのみならず環境の如何は其の人間を高上⁽⁷⁶⁾さすのみかかへつて其の人格を下落せしむる場合が多い。自分等の前途も大抵は此の環境の支配を受けるのである。／僕等の生活は其の環境の支配によつて昨日は東、今日は西と全く浮草の様にも思は

れる。／自分の過去を顧みると実に面白い。僕は師範学校時代に人間が太分変った。而し丹波の小学校へ出てからはもう一層變化した。これからまた一年間の生活は（即ち人生の五十分の一の間の尊い生活は）僕の人生に如何なる結果をもたらすだろう。

四月一日 土曜日 晴

今日から愈々軍隊生活に入るのである。隊内の生活は入営前に凡そ聞いて居たから特に驚く様な事もなかった。滋賀師範出身者十七名、僕等が五名、福井出身者が一名、総勢二十三名の案内である。それに此の家庭内の母親として小林班長さんと助教として上等兵が二人居られる。／体格検査後軍服を貰らつて着て見た。自分の姿は見へないけれどもどうやらこれで兵隊さんになった様な気がした。班内で宣誓式があり大隊長殿の勅諭並びに読法朗読後、僕が一同を代表して宣誓文を読み署名捺印した。間もなく正午になった。初めて軍隊の飯を食ふのである。硬質陶器の食器を貰らつてそれに問題の麦飯を盛つてもらつた。そして菜皿に芋と大根、湯呑に漬物を入れてもらつて一同揃つて食事をした。麦飯も大変うまくお菜も全部平げてしまった。／教へてもらふ事が一つ一つ新しい事ばかりなのと初めての生活なので少々困ることもある。

四月二日 日曜日 晴天

今日は日曜だけれどもまだ敬礼の仕方を知らないから班内から出る事が出来ない。／此の聯隊は営舎も大変奇麗で景色も非常によい。殊に班の東の窓からは近江富士を真正面に紺青の二ホの桜原に真帆片帆点々として真に天下の絶景である。

／窓から外を見て居ると前の桜が太分ふくらんで居る。もう一週間もすれば咲き揃ふだろう。ふと下の方に白いものが見へた。よく見ると練兵場の道を白いパラソルを傘した娘が郊外の散歩に来てゐるのであった。僅に一日の軍隊生活をしたばかりであるが何となく浮世がなつかしくなった。／昨夜は始めて寝台の封筒に入つて寝たがよく寝むれて気持ちよかった。今朝三時半頃に眼が覺めたが東の窓のカーテンが薄白く見へて居たのもう五時頃かと思つて喇叭が鳴るのを待つてゐたがなか／＼鳴らないので時計を見るとまだ三時半なのでまた一時間半程寝た。五時半少し前に眼を覺して班内一番に寝具の始末をした。／もう二日経つたが一年も居る様な気がする。

四月三日 月曜日 晴天 神武天皇祭

二日間の営内生活をしたばかりでよほど余祐^{マユヒ}が出来て来た。初日は何かする毎に一つ／＼まごついてゐたがもう一週間もすれば現役兵とあまり変らなくなるだろう。一日から今日ま

で休暇だったので管内は大迎叙しかったが今日夕方になって帰郷してゐる兵が皆帰へつて来たからよほどにぎやかになった。そして僕等が便所へ行ったりして途中で出遇ふとかん／＼になつて敬礼してくれる。而しまだ僕等は敬礼の仕方を教はつてゐないから答礼する事が出来ない。／＼中には先方から敬礼をしてもらつて面食つて頭をかいてゐる大將も居る。

／＼今日まではどれを見ても我々より上官ばかりだったが新兵が帰つて来たので星一つの御仲間が出来て少々心強くなった。／＼昼によく働くから夜は大辺よく眠れて気持がよい。寝附きもよくなった。朝は五時半起床だからよほど早く起きてきられないと思つて居たがいつも十分程前に眼が覚める。／＼喇叭が鳴つてからは寝るまで少しの間もない。

四月四日 火曜日 曇天

今日は初めて練兵があつた。基本体操から不動の姿勢、敬礼の仕方等を教はつた。／＼体操も学校でやつてゐるのは違つて一生懸命で然も二時間も三時間も続けてやるのだから身体中がいたくて仕様がなない。それでも一生懸命やつてゐると仲々面白い。／＼朝からは学科があつた（読法）。教官殿に教へてもらふのは今日が始めである。／＼昨日里内君が面会に来てくれた。妻君も同伴だったので班内の問題になつてゐる。

青春の赤き血潮が湧きかへつてゐる。青年には性といふ事に

ついては非常に敏い。

四月五日、水曜日 晴天

朝から九時半頃まで学科があつた。軍隊に關しての質問ならばどんな事でも答へて下さるので多年の疑問が直ちに解決が出来る。／＼地方の運動競技なんかはまだあまり感心すべき域に達してゐない、現今の様子はまだトバク的であるとの御意見全く同感である。其他諸外国の傭兵制度などについても質問した。／＼次の様な注意があつた。／＼これから暖くなつて桜の花でも咲き出すと兵營附近の郊外を美しいパラソルをさして散歩する人が多いが一現兵はこれに眼をとられたり甚だしきは窓から首を出してこれにカラカツたりしてはいけない。

こんな事は唯に軍規を乱すのみならず其人の人格が疑はれる。君等は官は一兵卒であつても心は何処へ出ても恥しくないナイス、ジェントルマンとして自ら固く持して居なければならぬとの御訓（譯カ）であつた。同感である。努めて実行しやう。／＼教練には基本体操、停止間の敬礼、速歩行進等の練習をやつた。／＼夏江が女学校の入学試験に合格した。もうこれからは他の事は心配する必要がなくなつた。自分の事を一生懸命行つてゐたならばよいのである。

四月六日 木曜日 晴天

昨日から敬礼の仕方を教はつた。教はつたら即刻実施である。

始めは何だかきまりが悪い様で一寸やりにくい、やってみるとき程にもない。／去年十二月入営した初年兵の諸君に敬礼すると答礼したまゝで少しも手を下さない様な事があるからこちらもいつまでも挙手して居なければならぬといふ様な滑稽もある。／東の窓から見える桜が咲き出した。枝の間から白帆が現れて静に去ってしまった。北の窓を見ると営倉の黒い板張の中に(A)白い上の様な印がついてゐるのが馬鹿に眼に附く。向ふを見ると練兵場の周囲に立つてゐるポプラの並木の間から東海道の白い道が青い平野の中に細く消えてゐる。／朝の教練を終はつて帰つて来ると梅津から端書が着いてゐた。富美子が府立第二女学校へ入学したとの事である。

四月七日 雨天 金曜日

入営して初めて雨が降った。朝の仕事ですました後で軍靴の洗濯に行った。雨の降るのに朝早くから眞黒の靴をぐしぐしこすり、それがすむと麦飯をう呑みにしてやれ／＼と思ふ間もなくすぐ学科が始まる。入営前まではいつも八時頃まで寝てゐたが此頃は八時なれば一仕事すました後である。これまでは生活状態がよ程変つたので苦しい事も時にはある。而しこんな経験は金銭で買ふ事が出来ない。天が我々に下した福音である。社会へ帰つてからもこんな緊張した気分で暮してゐたならばどんな事でも出来るだろう。／願はくば此の緊

張の気分を除隊まで保持したいものである。上等兵、伍長位になると多少気分がゆるむかも知れないから。

四月八日 土曜日 晴天

八時から軍隊内務書の講義があつた。其の後で一年現役兵に關しての条例についての極大体の説明があつた。／それに依ると僕等は来年三月終末試験を受けて及第すれば見習士官として三月予備役に務めれば陸軍歩兵少尉となりて高等官八等の待遇を受けらるゝとの事である。これは一年現役兵としての僕等に与へられた特典である。僕が若し任官すれば来年中には奏任官の令遇(マツ)を受けることが出来るのである。これが小学校なれば三十年間も勤続して漸く奏任待遇としての令遇(マツ)を受けるのである。彼此比較すれば雲泥の差である。一つ奮発して長いダンペラをつつてやろう。／午後二時から窒扶斯の予防注射があつた。班へ帰つてから夕飯まで寝た。次の土曜も其の次の土曜も二回目三回目の注射があるとの事である。だから此月は外出出来ない事になる。

四月九日 日曜日 晴天

昨日注射を行ったから朝飯だけ食つて正午まで寝てゐた。／今日は日曜日だのに現役兵(役)の甲班の人が朝早くから銃槍の練習をやつてゐる。この人等はあんなにして毎日朝起きるとすぐ木銃を握つて出で午後は僕等が夕食をすました後で

もまだ気合の声が聞へる。これを十二月まで続けて漸く上等兵になる事が出来るのであるそうな。而し其中でも三分ノ一程だけが選抜されて進級するのであつて、後の人は一等卒として残るのである。其事を思ふと僕等の待遇は実に有難い。あんなに僕等が毎日きばつたらどんなになれる^ぞ知れない。上等兵もあんなに奮励しなければならぬと思ふと三つ星を附けて居る人はなか／＼ねうちがある。／午後は酒保へ居つた。ぜんざいを二杯食べて桜を見て居ると初めて春らしい気分がした。／隊内も何か娯楽機関が設けてあると理想的であると思ふが軍規を乱さない範圍に於てなれば、より以上の士気を涵養し得る事は確である。

四月十日 月曜日 晴天

朝から歩兵操典（射撃立射及び陸軍礼式中の最敬礼）の講義があつた。昼食後銃の授与式があつた。／中隊長殿から後で訓辞があつた。銃は歩兵の唯一の武器であつて歩兵の命ともいふべきものである。そして銃は風力、天候、湿度及び射撃者によつて各々の度合が違ふのだから、また各銃によりても其銃独特の性質があるのだからよく其の場合、性質なりを（よく）会得して射撃を上手にせなければならぬとの事であつた。／午後は行進間の敬礼及び特に停止して敬礼する場合を教はつた。僕等の教官殿はほんとうに理想的の教官であ

るから教官殿に接してゐる時は一日中で一番のび／＼した気がする。

四月十一日 火曜日 雨天

八時から大隊長殿の軍紀及び軍人精神並びに読法に就いての講義が約一時間半ばかりあつた。午後銃の大体の名称を教はつた。其他の時間は体操があつた。／六時半夕食後約一時間随意時間として与へられた。籠の鳥がはなれた様に全員総出で酒保へ出掛けた。入隊してから初めて引率者を離れて各自自由に室内から出る事が出来る様になつた。酒保まで行くとも、も早や満員になつてゐる。／其の混雑は言葉にはとても言ひ現はせない。その混雑にもまれながら漸く菓子を一包買ったと思ふと後から箒でたゞき落される。外へ出る頃には折角買ったものが何もない様になつてゐる。ぜんざいを一杯買った後も食ふ頃になると汁は皆こぼれて終つてもちだけが二つ寂しそうに残つてゐる。中には帽子を飛ばされ頭から湯気をばつ／＼と出して奮闘してゐる強者もある。またぜんざいの汁を軍服へ一面に流して、まるで戦場に出て重傷を負ひ鮮血、淋漓とほとばしり出でたるが如き体たらくの勇士も居る。其の混雑は田舎祭なんかは到底及ばない盛況である。／此処に来ると軍隊の秩序、規律といふ様なものは見たいと言つても見られない。も少し各自、自覚したらよからそうなのだが、

こんな事では折角教官殿が汗を流して訓練された価値がなくなる。こんな所も見せられると軍隊教育が凝^こはれる。而し地方には仲々見られない痛快な所もある。／何を言っても軍隊は青年のよい修養所である。

四月十二日 水曜日 晴天

学科の時、徴兵制度に就いて質問した。国民全部兵隊として軍隊生活に入らしむるのは理想だけれどもこれは現代にありては経済と動員計画とに差支へるから第一乙種、第二乙種等を入隊したいのは山々だけれども右の様な次第だから仕方がない。／また雑役廃止に就いても経済の制限を受けるから今の処ではこれも仕方がない。午後駈走を教はった。／隊内生活になつてから特にイヤに感じたのは各自自己主義になつて一碗の飯でも一皿の菜でも少し入れ様が少いと喧嘩のやうにして一粒でも沢山入れてもらふ様に運動する。其他何事をしても一寸でも楽な事をしやうとし自分が困る様な事があればすぐこれを他人に譲ろうとする。こんな事を皆が平気でやつて何とも感じないで居る。これが人並以上の教育を享けた人の集つてゐる室内と言へるだろうか。人間の弱点を赤裸々に表はして平気で居られる人間は紳士として許す価値がない。／然しこんな事を言つて居る自分も実は初めの内は、もつと飯を入れてくれとか、もう少しお茶^{（マ）}を盛つてくれとか言

つたものだが後で気が附いて見ると自分の唾棄すべき行為が目の前に浮んで大辺イヤな気がした。考へて見ると一粒の飯や一筋^{（マ）}の茶葉位多くとも少くとも空腹になることには大なる関係がありそうにも思はれない。／幸ひ自分は気が附いたからこれからは断然かゝる行為はよそう。古諺にも「武士は食はねど高楊子」といふ事があるが武士の流である吾人軍人は夢々かゝる行為があつてはならない。／軍人たるたしなみばかりでなく相当教養を享けた吾々は是非ともかゝる行為はやめなければならぬ。

四月十三日 木曜日 曇天

朝から霧が深く立籠めて少し寒むい様な気がした。／午前の学科、射撃と天候の関係、午後内務書通読／教練をやつてゐると風もないのに桜の花がひらくと散つて来た。正午、去年一年現役兵として入營した滋賀師範の人で仕官候補生となつて残つてゐる人がやつて来た。きれいな軍服に長い刀をぶらさげて居た。僕等も来年になればあんなになる事が出来るのだ。

四月十四日 金曜日 曇天

七時から銃の分解掃除の方法を教はった。十時頃試験射撃に出したから銃腔が真黒になつて掃除に困まつた。／上官に対して物品を授受する時の方法を教はった。何でもない事柄だ

けれどもあらたまつてやってみると仲々むづかしい。／三時半に教練を終つて入浴に行った。こんなに日の中に風呂にでも入ると多少苦しい仕事をしてゐても一度に^{マユ}労が回復する。／師範学校時代に学校から帰へるとすぐ湯に入つて手拭をぶらさげたまゝクローバの上に寝ころんでのどかに流れて行く雲をながめてゐた事が想ひ出される。

四月拾五日 土曜日 晴天

朝から十一時半頃まで兵器の掃除なし、十一時半より中隊長殿の携帯兵器ノ検査があつた。検査後、教官殿、中隊長殿の注意があつた。／午後一時より先週通り予防注射があつた。教官殿から明日午後の外出許可が出た。夕食後、休日及外出(内務書)の説明があつた。

四月拾六日 日曜日 晴天。

昨日の注射の爲少し身体がだるかつた。朝食を済した後^{マユ}包布の中(を)へ毛布を二枚入れ蒲団の様にしたり敷布に給与番号を入れたりした。また十時半頃まで室内の大掃除をした。／正午、母と妹が面会に來た。入営してから始めて外出が出来る日なので班内全部外出した。僕も二人を^{マユ}参内して三井寺へ行つた。／駅まで送つて帰る途、高橋、西田、森本、竹内君等に遇つて一緒に五時帰營した。／外出しても別に変わった事はない。而し外出出来ないとなると不思議なもので外出し

たくなり出て見るとさ程にもない。これが人間の弱点なのかも知れない。

四月拾七日 月曜日 午後雷雨アリ

八時から中隊長殿の日本の軍備といふ題目にて学科があつた。／話を聞いて見ると、なる程軍備の必要な所以も承知出来るが社会に居つて新聞などで軍備縮少或は平和會議又は軍閥打破等盛に説へられ又は尾崎、加藤代議士等の諸説を聞きなどして全く中毒して終つたものに今日の様な話を聞かすのもよい。凡て物は一面のみから見ては正当な判断を下す事は出来ない。然し新聞などで説へつゝある議論も一種の国サクと見れば見られない事もない。即ち太平洋會議も軍備縮少も敢へて我が国が米國辺りと歩調を合してやる必要もない様なものだけれども世界の大勢、及び現今世界に置ける日本の位置等から考へて見れば必要ならざる軍縮も必要として断行せなければならぬかも知れない。而し軍備をいくら整へても戦争は軍備だけでは出来るものでないから此の点もよく考へて見る必要がある。／軍縮論者もかゝる底の考へから割り出して議論なし、國家の爲を考へて宣伝するのならばよいが、左もなくして只いたづらに若い女が流行を追ふ如き心理状態にて之れを叫(ば)ぶが如きは大きな誤りである。／要するに凡て物は一面のみより見ては駄目である。

四月拾八日 火曜日 晴天

今日は師団長閣下の随時検閲であつた。明日も同じく検閲である。／朝から装填の方法を教はつた。左手が痛くなつて弱つた。／午後着剣の練習及び学科として勅諭第三（武勇）の説明があつた。／夕食後、酒保のベンチで同輩が歌をうたつて居たがそれを後で古兵殿が聞いて切りに憤慨してゐた。勿論歌なんか歌ふといふ事は全然まちがつてゐるが注意するにしても単に歌つたらいけないと言へばよいものを、お前等は師範学校を卒業したゞけだないか、志願兵なら兎も角も現役兵だないかとか種々下らん事を一人つぶやいてゐた。なぜあんな事を言ふのだろう。其の心の奥底には何物かゞなければならぬ様に思はれる。／吾々一年現役兵は衆目の注意の焦点となつてゐるのであるから大いに気を付けねばならぬ。軍隊といふ所は皆根性が変にひねくれて人を正当に見る事が出来ない様な人が沢山居る様に思はれる。いや、そんな人になつてしまふのである様に思はれる。

四月拾九日 水曜日 晴天

朝の学科は勅諭第四条の講義、午後の演習は前時間の練習及び伏射の新教材があつた。／昨夜初めて十時まで僕等の班だけ延燈が許された。軍隊へ入ってから大分頭がボケた様になつたので一つ勉強してやろうと思つて詩聖ダンテ（朝日新聞

社発行）を十五頁程読んだ。お蔭で今朝から眠くておまけに教練が一寸長かつたのとだん／＼暑くなつて来たのとで体が大変だるかつた。／教練の時、助教に矯正される時、何んだかしかられてゐるやうな声に聞へて残念でたまらない。これまで比較的丁寧な言葉を掛けられて居た自分等が、にはかに隊内へ入つて頭から怒鳴りつけられると自尊心を傷けられたやうに考へられて頗る不愉快な気分になる。然しこれも慣れゝばそんなに感じないかも知れないがもつと何とか改正が出来ないものかな。わざと故意に卑しい言葉を用つて居るやうに思はれる。／渡辺君から端書が来た。かなり重要な事件が書いてあつた。よく熟考して返事しやう。

四月二十日 木曜日 晴天

学科 勅諭第五条講義、夜は軍隊内務書週番の項通説。／今夜から常時延燈を許される事になつた。故に消燈後一時間半即ち十時半まで毎晩電（氣）燈がついてゐる事になつたのである。／これで漸く自分等は世界の大勢に遅れずに行くことが出来るやうになつたやうな気がする。然し十時半まで起て居ると八時半点呼後すぐ寝た時とは二時間も寝る時間が少くなつたのですぐ翌日の仕事に影響して来る。軍隊は学科や実科として教官から教はる時間は極めて僅であるけれども其の以外に自分の生活をして行くだけの用意は一切しなければな

らないから残った時間はこの為に全部費されて終ふ。而しこれも戦闘を基準としてやる仕事だから仕方がない。／宮庭の桜も散ってしまった。

四月二十一日 金曜日 晴天

教練の時間に初めて練兵場へ出た。丁度籠の鳥がはなたれた様な心持で皆が嬉しがってゐる。／休息の時間青草の堤に腰を下して煙草をふかしてゐるとどこかの中隊が突撃の喇叭と共に着剣をひらめかして密集突撃をやつてゐる。中隊長の指揮刀が一耀すると一度に天地も震ふ突撃の喊声が上がった。毎日こうして朝から晩まで汗まみれになって駆け廻り浮世の花をよそに見てゐる(も)るとまた一種云ふべからざる痛快な所がある。

四月二十二日 土曜日 晴天

十時まで先週と同じ様に兵器草具の手入れをした。十一時から教官殿の検査を受けた。／午後は第三回目の予防注射を行った。これでいやな注射も済んだわけである。

四月二十三日 日曜日 曇天

朝から例の通り室内の大掃除を行った。昨日注射をやったけれども先週の様にはこたへなかった。／午後外出した。滋賀師範出身者はそれ／なじみの所があるから皆行つてしまふが僕等は全くの孤独だから外出しても仕方がない。それでも

一週間も出られないと思ふとなんだか出たくなる。／渡辺君が朝から面会に来るはずだったがどういふ都合か来なかった。

四月二十四日 月曜日 雨天

今日は朝から身体がだるくて学科の時などは眠くて弱った。

／殊に朝から雨が降つてゐたので天氣の加減も大いに影響したのだらうが注射の結果もまだすつきりしてゐなかった。学科の時は教官殿のシベリヤ出征の実戦談を聞かしてもらつた。而し気分が悪かつたのであまり面白くもなかった。十時頃に梅津の叔父さんが面会に来てくれた。／午後の教練も漸く辛棒して済したが、午前とは一層気分が悪くて教練後は晩までじつとしてゐた。夜背囊のつけ方を教はつた。

四月二十五日 火曜日 晴天

昨夜早くから寝たので今朝はすっかり全快してゐた。／窓を開けると練兵場の若(青)葉が青々として殊に雨上りの清々しい(空に)海に朝日が射して大辺気がよかつた。／此のすが／しい青葉を見ると丁度去年の今頃附属小学校で教生をやつてゐた時の事が想ひ出される。あの後の教生の席から運動場の白い屏(ゆ)をバックとして若緑の生々とした葉を見た時の気持は何とも云へない。而しまた今班(内)の窓から営倉の黒い板屏をバックとしてモミザの薄紅い若葉と雑木の青葉とが萌え出たのを見た時には、其の生活こそ大変異つてゐ

るけれども、そこにはまた一種共通な感じが起つて殊に昔が懐しく想はれる。／学科勅諭最後の項 衍義。

四月二十六日 水曜日 晴天

学科 体操教範（広用体操の項）通説説明。／十時頃までシベリヤ出征中大正八年六月三日曉方ニコリスクの守備に従事してゐた我軍拾三名の戦友が、ニコリスクの北方イワノフより襲来せる過軍三百名の包囲攻撃を受け二時間に亘る激戦を交へ身に数弾をうけて尚屈せず、最後の突撃を試みて全滅した。其の名譽の戦死者の中には本中隊出身者、即ち僕等の先輩が四名あつたとのことである。そして戦死者の功績は聯隊史となつて永久に聯隊に保存されてゐるのである。それも一々読んでもらつた。殊に貧苦の家から働き盛りの男を出し、或は老父母の杖とも柱ともたのむ一人の愛子を戦死した家もある。而して其の家庭からは各々連隊長にあてゝ我が子が名譽の戦死を遂げたのは武門の面目この上もなく、悲しみは消え失せて威喜に満ちてゐるとの意が述べてあつた。聞いてゐる中に思はず涙が出そうになつたのをあやふくこらへてゐた。／其の父兄がかゝる手紙を出さんとして筆をとつた時の想ひは？。誰しも我が子を死なせ弟を失なつて喜ぶものはないが而しそこを一步踏み出して喜ぶと書く、この一字を書く其の時の心情を想ひやれば実に血の涙がこぼれる。／戦死した

人は各々上等兵に進み金シ勲章を授与されてゐる。勿論金シ勲章も名譽であるが将来ある一身を犠牲にし其の人の連ケイある所には皆多大の影響を及ぼしてゐるのである。殊に現在の廃兵の如きは立派な体を持ちながら生れもつかぬ不具者となり、（そ）其の日の生活に困つてもこれを扶養しないと云ふ如きは実に世界の一等国として覇を天下に称へてゐる所の国民のすべき業ではない。人道上にもまた許し難き罪惡を流すものである。国家並びに一般世人はもつと軍人といふものを了解しなければならぬ。もつと待遇せなければならぬ。／何と言つても命を、貴い一つしかない生命を的にして働いてゐるのであるから、これ程危険な仕事はない。またこれ程貴い職務もないのである。

四月二十七日 木曜日 晴

学科 陸軍礼式 衛兵の敬礼／朝から腹が痛くて弱つた。便所へ三度行つたがまだなほらない。教練中によく注意される。これも軍隊の立前かも知れないが軍隊の言葉は仲々脾肉な事が多い。従つて度々癪にさわる事がある。例へば僕は元來鼻が悪いから、朝なんかは時によるとつまつて呼吸困難な時がある。そんな時に一寸走りでもしやうものなら到底も口を閉ぢて氣ヲ附ケの姿勢をとつて居られない。あまり困しいから少しばかり口を開けてやつてゐると、お前は呼称つけて動作

してゐるのであらうとか、または一生懸命になつてやつても時によると違はしたり、又はあまり固くなつてへまな事をやつたりする。そうするとお前は出鱈目やつてゐるなんて言はれることがある。もう少し何とか言へそうなものだが。

／而し何程癪にさはつても仕方がない。これをこらへてゐるのも一つの修養である。而し自分が注意されるのは自分がどこかに欠点があるのだから、この忍耐を單なるあきらめ又は安価なるダ協をしてはならない。

四月二十八日 金曜日 晴天

朝から一時間半ほど教練をやつて十時頃から英国皇太子の奉迎に行った。／午後教官殿から六月一日から教官が交代される（確定してゐないが）かも知れないとお話を聞いた。／本中隊附で現在航空隊へ入つて居られる柴田中尉から本日端書が着いて、僕等に宜ろしく伝へてくれとの事であつた。六月からの教官は柴田中尉殿かも知れないとの事である。教官殿がお交りになるのは僕等の最大不幸である。何とかならんものか知ら、どうも困つた事が湧いてきたものである。

四月二十九日 土曜日

今日は土曜日だから毎週兵器の検査がある事になつてゐるので学科も教練も休みである。その為か今日は朝から日朝点呼に出る時に軍靴をはいて出て体操をやつた。十中隊の裏から

将校集会所の方も廻はつて〔馬へんに走〕走があつた。／正午まで兵器廠襯衣^{（2）}膝下の手取をした。／午後京都から渡辺君が面会に来た。一時間半程面会所で話してゐた。帰つてから室内の大掃除をやつた。

四月三十日 日曜日 晴天

今日は靖国神社の祭礼と日曜と二つかさなり合つてゐる。／朝から中隊で陸軍墓地へ参拝した。帰つて来ると成合の叔父さんが面会に来てくれてゐた。十一時頃まで話してゐた。昼食の時には班長殿も上等兵殿も居られなかつた。而し普通の日より少し御馳走であつた。小豆飯に煮卵、牛乳等があつた。小豆飯といつてもこれまで食べて来たのとは少し様子が變つてゐた。即ち軍隊の飯は沢山一時に焚く上に、今日の飯事^{（マツ）}当番殿が小豆を焚く時に少し眠りをして居られたそうなので小豆の肉が皆たまらなくなつて飛び出したらしい。お蔭で切角^{（マツ）}のおいしい小豆飯も小豆と飯とをこね合して出来た様な何だかわけが解らない塊になつてゐた。午後は外出した。これまでの日曜とは違つて体の具合も大辺よいし、祭日なので八時までに帰營せばよいのだから今日こそほんとうの日曜の様な気がした。八時には全部無事帰營してゐた。今日で軍隊生活を始めてから丁度一ヶ月経つたのである。この一日に入營した当時は一つも様子が解らなかつたのとこれまで軍隊

といふ社会をあまり我々は曲解し過ぎてゐたので面白くなかつたが、此頃はよく理解が出来る様になつたので大変面白くなつた。もう一年も居る様な気がする。